再会の日に。

村上　龍之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
再会の日に。

【Ｎコード】
Ｎ８１４９Ｎ

【作者名】
村上　龍之介

【あらすじ】
８月１日。
主人公の「俺」は目覚めると、自分がいた一帯は焼け野原になっていた。
俺は、相棒の「あいつ」を探し始めるが、「あいつ」はどこにもいない。
そうこうしているうちに、人を探しているという少年に話しかけられる。「あいつ」はまだ見つからない。これ幸いとばかりに「俺」は、「あいつ」を一緒に探して欲しい、という旨の言葉を伝える。

少年の話が終わったあと、「俺」は「あいつ」のことを話し始める

――

旅立ち※２ｃｈ晒し中（前書き）

初小説。
ドキドキですｗ
何かご指摘があれば、いってください！
あ、「」が多いのは仕様です

旅立ち※２ｃｈ晒し中

８月１日　午前２時

辺りを揺らすような大きな音で、俺は目が覚めた。
「――なんだ、これは。」
見渡すと、自分のいた一帯は焼け野原になっていた。
「……あいつは？　おい！　どこだ！」
叫んでみたが、返事はない。
とりあえず、辺りを探してみることにした。

かつて大通りだった場所は、今や阿鼻叫喚の人々で埋め尽くされていた。
少しめまいがしたが、気を取り直してまた探し始めた。
……３０分経ったが、未だ見つからない。どこへ行ったんだろう。
「……の。」
「あの～……」
俺は探すのに夢中で、話しかけられているのに気付かなかった。
彼は、もう一度大きな声で話しかけてきた。
「あの～！」
「おっと、びっくりした……何か御用でも？　俺は忙しいんだけど。」
「この辺で、伊東正という人は見かけませんでしたでしょうか……？」
俺はちょっと考えてみたが、伊東という男に心当たりはなかった。
「いや、しらないな、ちょっと俺は忙しいから、その辺の人に聞いてみて！」
投げやりに言ったが、どうせこの状況では道行く人に話しかけたと

しても、睨みつけられるのがオチだろうと思い直し、彼のほうを向いた。
「しょうがない、俺も人を探してるんだ、一緒に探そう。」
「ホントですか？ありがとうございます！」
「その伊東、って人の容姿を教えてくれ。」
俺は彼から伊東さんの姿形を教えてもらった。
「では、あなたが探している人を教えてくれませんか？」
彼から話を聞き終わったので、彼はこちらの説明を求めた。
「あいつか？あいつは……――

――7月1日

「となりの純くん、赤紙きたってねぇ～。立派にお国のために戦うんだって、はりきってたわよ～。」
となりの純くんとは、うちの隣りに住む田山純一のことだ。彼は昔から体が大きく、俺が喧嘩で勝ったことはない。
「俺も時がきたらお国のために立派に戦うさ。」
冗談のつもりだった。しかしお袋は
「あら、それならお赤飯炊いとかないとね～。」
といった。本気にしたようだ。

俺の住んでいる地域は農村だった。徴兵のせいで最近男手が少なくなったので、田山と俺とあと数人の男衆で力仕事をやっていた。数人といっても、残りは６０歳くらいのおじいちゃんなのだが。そんなもんだから、若い男は俺と田山しかいなかった。
俺と田山は小さい頃から仲が良かった。
昼には野山を駆けまわって遊び、夜には一緒に風呂に入ったこともあった。

だからそんな田山が徴兵されると知ったときは、動揺した。
しかし、これも試練と思い、俺は我慢することにした。
　俺は田山に赤紙がきた、ということを知りつつも動揺を見せないように田山の家へいつものように話に行った。
田山は、俺の顔を見て開口一番、
「赤紙が来たんだ！」
と大声で言った。
村中に響き渡るような大きな声だった。
「ちょっと……うるさいぞ。」
「おっと、すまん。」
田山はすぐに謝ったが、興奮した様子はその後数十分続いた。
その後はいつものように喋りながら畑へと向かい、農作業を行った。
帰りは田山の家へ寄って、酒を一杯引っ掛けてから帰る。これもいつものことだった。
しかし、今日はいつもとは違った。田山のお母さんが息子に赤紙が来たので、赤飯を炊いて俺たちを待っていたのだ。
いつもとは違うご馳走に、俺は涎が出た。
「あらあら、そんなにお腹減ってるの？じゃあ、食べていきなよ。」
田山のお母さんにこういわれた。もう待ちきれない、箸はお茶碗へと向かっていった。
赤く、それでいてほんのりとした甘さがあり、上に小豆がのっていて、その上ごま塩がほどよくかけてある。
この赤飯は、まさに極上の逸品だ。
ホクホクとした煙に、香ばしい香りが立ちこめ、塩味が効いた焼き鳥をおかずに赤飯を食べる。俺はこれが天国なのかと思った。
次から次へと俺のお腹へと消えていく赤飯を見ながら、田山は
「お前、遠慮って言葉知らんの……？」
といった。この量を見れば当然の言葉だ。
あまりにもおいしそうに食べるものだから、田山のお母さんは
「包んであげようか？」

と聞いてきた。
俺は、笑顔でお願いした。

7月2日　午前1時

俺は厨にいくために目が覚めたのだが、何かがおかしいことに気づいた。
「……？」
気のせいだと思い、厨のほうへ向かった。
途中、ふと振り返ってみるがやはり何もない。
俺は、いつものように厨に入り、戸を閉めた。
そしていつものように、用を足して寝室に戻ろうとしたのだが、戸が開かない。
2、3分戸と格闘していたのだが、やはり開かない。
「壊れたかな……ちょっと強引にやるか。」
俺は思いっきり戸に体当たりをすることにした。この際、仕方がない。
2回ほど体当たりすると戸は音を立てて前に倒れた。家人が起きてこなければいいが。

――その時、台所のほうで物音がした。

お袋が目を覚ましたのかと思ったが、すぐにその考えを捨てた。
男の声が聞こえたからだ。
「おい、なにか物音が聞こえなかったか？」
「そうだな……家の住人が起きたのかもしれない。」
今この家には俺以外には男はいない。この時間に俺以外の男がいる

とすれば、それは盗人か、田山しかいない。
俺は急いで、それでいてなるべく足音を立てないように廊下を走り、外の防空壕に逃げ込んだ。
「おい、厨のほうを見てみろ。」
家の中から話し声が聞こえる。俺が先刻倒した戸に気づいたようだった。
「さっき見たときは、普通だったよな？」
「あぁ……やはり誰かが起きたのかもしれない。猫にはこんなことできないだろうからな。」
やはり、気づかれている。どうしたものか、と俺は考え込んだ。
相手は二人、こんな時間に家の中にいるんだ、武器を持っていない可能性は低い。それにさっきあいつらは台所にいたしな、包丁を持っていかないなんてことはないだろう。
家の中にはお袋がまだいる。最悪の事態も想定できる。
俺は、家の中に戻ることにした。怖かったが、お袋が死ぬよりマシだ。
「まだ家の中にいるだろうな。ちょっと探してみるか。」
男の一人がそういって別の部屋へ向かったその一瞬の隙をついて、俺は決死の覚悟で家の中へと向かった。音を立てないよう慎重に。
「……いないなぁ。」
しばらくして、2階へと続く階段の方から男の声が聞こえた。どうやら俺のことは諦めるらしい。
　男二人は、俺が家の中へ戻ってきたのには気づいていない様子だった。
１０分ほど経った頃だろうか、またあの男二人の声が聞こえてきた。
「ん～ん、ないな……家を間違えたか？」
「そうだな。これだけ探してない、ということはやはり間違えたのだろう。」
男二人は玄関から出て行った。律儀な泥棒だ。
……命拾いをした、暗がりで見えなかったが、片方の男は屈強な体

つきをしていた。対峙すればまず間違いなく負けただろう。
なんだったんだ、あいつらは……
俺は言い知れぬ違和感を覚えたが、疲れていたのか、寝室へ来ると布団に倒れこむように眠ってしまった。

7月2日　午前7時

朝の光が辺りを包み込んだ。この辺は盆地なので日の出は遅い。
俺は今日のことを思い出していた。果たしてあの二人はなんだったのだろうか。
一応家の中のお金や、何か無くなったものはないか探してみたが、昨日と変わりはなかった。
あいつらの一人は家を間違えたと言っていた、そうすると、今日明日辺りにまたどこかへ盗みに入るかもしれない、近隣へ警告に行こうと思い立ち、とりあえず一番近い田山の家へと俺は足を運んだ。
「……そんなことがあったのか。」
「あぁ、で、俺の家から一番近いこの家が、今日狙われるんじゃないかと思っているんだ。」
「ふむ……」
俺は夜中あったことを過不足なく田山に話した。
田山はここ最近この一帯の民家に夜中、賊が侵入するということが頻繁に起こっていることを教えてくれた、するとある共通点が浮かび上がった、それは侵入を許すだけで、盗られたモノは何もない、ということだった。
「さすがにおかしいな……そうだ、今日泊まっていかない？」
「ん？なぜだ？」
「わからないか、今日賊はここへ来る可能性が高いんだ。つまり、待ち伏せすれば良いというわけさ。」
「なるほど……それは良い考えだ。」

……そんなこと考えつかなかったなんていえない……
さて、その後俺たちはいつものように畑仕事へ行き、いつものように帰りに田山の家へ寄った、ここからはいつもと違う。
「さてと、用意しなければいけないな。」
そう、賊に備えて用意しなければいけないからだ。
例の賊が現れるまで、あと４時間ほどだ。

７月３日　午前１時

「……はっ！」
俺たちはいつの間にか寝てしまっていた。
いつもこの時間帯は寝ているので、当然だ。
「……む……」
そんなことを考えているうちに田山も起きた。
時間は午前１時、昨日賊が現れたのと同じ時間だ。
俺は耳をすませて、辺りを警戒してみたが、今のところ俺たち以外の物音は聞こえない。
それから１０分ほど経過したが、やはり何も起きない。
今日は現れないのか？と思い始めた矢先のことだ。田山が何かに気づいた。
「どうした？」
「おい……これ……」
なにやら青ざめた様子だが、何があると言うのだろうか。
俺は、田山が見ている方を向いた。そこでは、驚愕が実体化して歩いているような現象が起きていた。

――音もなく、男二人が現れていたのである。

「田山、お前何も聞こえなかったよな……？」
「お前こそ、何も聞いてないよな……？」
怪奇現象だ。
「と……とりあえず、賊はやってきたから接触してみるか――」
田山は相当怖がっているのか、控えめな言葉を使っている。
「お……おい！」
「――ん？」
田山が声をかけてみた。どうやら無事気づかれたようだ。
「こ……こんなところで何をしているんだ？」
「君、我々のことが見えるのかね？」
「そ……そうだけど！」
男の片方が話しかけてきた。しかし、妙なことを言うな……お前らが見えるからなんだってんだ……
「ついてきてもらおうか？」
「……え？」
今なんと？
「ついてきてもらおうか？といっているのだが……聞こえなかったかね？」
寝ぼけてるわけじゃ……なさそうだな。賊が俺たちについてこいって？しかもお前らが見えるからなんとかかんとかって……
「聞き入れてもらえないか……まぁ、予想はしていたのだがね？そうとくれば力づくでついてきてもらうよ。」
男二人が俺たちの手を掴んで、ここに現れたのと同じ方法でどこかへ連れ去ろうとする。そうはさせるか！
「お……おい、暴れるんじゃない……おい！」
俺たちは必死で暴れた、家中のものを壊しかねないくらいに。
「……しょうがない！いけっ！」

――その時、ふっと体が浮かんだような気がした。その瞬間、目の前が真っ暗になった。

第一章　終了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8149n/

再会の日に。

2010年10月9日13時46分発行